

擬似同語反復文と擬似矛盾文

大久保朝憲

1. 本稿で扱う問題

本稿は、「ネコはネコだ」「このネコはネコではない」のように、主語と述語の主要部に同一の名詞句が生じる名詞述語文の肯定形・否定形の発話についての一試論である。これらのタイプの発話は、それぞれ「同語反復文」、「矛盾文」などとよばれることがしばしばであるが、これは、おのおのの文を論理命題と考えたときに、その真理値が前者ではつねに真、後者ではつねに偽になることによる。あとで述べるように、われわれは文の意味を真理値との関連で考えることも、またこれらの発話が参照するとする非言語的な対象世界（現実・認知などの）との関連で考えることもしないので、大久保(2000)以来、両者それぞれを、「同語反復／矛盾しているように見える発話」という意味で「擬似同語反復文的発話」「擬似矛盾文的発話」とよんでいる。以下、便宜的に両者を略して、「擬似同復文」「擬似矛盾文」と呼ぶことにする。本稿の目的は、このような特殊な発話がなぜなされるか、話し手はどのような意図をもってそのような発話をするのかといったことを説明することではなく、これらの発話が、以下に述べる「言語に内在する論証」という観点に基づいて正しく記述され、それがこのような見地による言語現象の記述の適切性を裏づけるものとなることをしめすことである。

2. 本稿のアプローチ

本稿であつかう現象に対する具体的な接近法としてもっとも頻繁に見られる

ものは、「XはXだ」「このXはXでない」という発話では、ことばのうえでは同じ「X」でも、実際には主語と述語の「X」が「さしているもの」が同じではないといった説明である。これはまた、このようなタイプの発話についての非言語学的な説明でもっとも直観にうったえるものかもしれない。しかしこのような説明は、文や述定についてあらかじめ以下のことを前提としたものである。

- (i) 発話は、具体的な現実世界なり観念上の認知表象なりという形で、なんらかの対象世界を参照し、それを記述しようとするものである。
- (ii) (i)と関連して、「述定」とは、主語名詞句が「指示する」対象に、述語名詞句によって「表される」ある属性を付与することである。

したがって、たとえば「XはXである」という発話は、主語名詞句「X」が指示する対象が「X」という属性をもつという対象世界を記述したものということになる。そのため、主語の指示対象の同定のために使用した名詞「X」と同じ名詞「X」がその属性として付与されることになり、「同語反復」となるのである。

われわれは、言語が言語外の対象世界と無関係であると考えerわけではないが、そのような言語外的な事実をあえて排除した上で、ソシユールの意味での「自律した体系」としての言語をどこまで正しく記述できるかということ¹⁾を追究し、それに際して「論証 argumentation」という言語的な概念をもとに問題の発話の記述を試みる。われわれは、人間が日常的におこなう言語活動のほとんどは、単にある事態を記述しようとするものではなく、それに続くなんらかの結論に方向付けられたもの(論証)で、それとの関連でのみ意味を持つと考えるが、これはフランスの言語学者である Anscombe と Ducrot によって提唱され、その後、変遷をへて現在にいたっている「言語内論証理論 *théorie de l'argumentation dans la langue*」における基本的な考え方である。この理論の詳細について本稿でふれることはできないが²⁾、後の議論との関係で、発話の方向づけについて簡単な例を見ておこう。

- (1) このネコはネズミをつかまえる。

この文が発話される文脈にはさまざまなものが考えられ、その中には、単に「このネコ」の性質を記述せよという要請に対する純粹な答えとして述べられる場合も考えられる。しかし、それよりもっとありうべき文脈としては、たとえば「このネコ」を飼うことにどんな有用性があるかということが問題になっていたり、また別の文脈では、「このネコ」がペットとしてどれほど「非野生化」され、飼いやすいものになっているかが問題になっているのかもしれない。いま述べた二つのケースについて、次のような発話のつながりを考えることができる。

(2) このネコはネズミをつかまえる。だから飼うべきだ。

(3) このネコはネズミをつかまえる。だから飼うべきではない。

つまり、(2)と(3)の前半は、同じ字面であっても、それによって言おうとしていることはまったく逆で、そのことは、(1)のみ（あるいはそれが表すとする事態）をいくら分析しても知ることはできない。これを、「文脈情報」（とそれにもとづく推論）のようなより漠然としたものにもとめるのがおおむね従来の語用論の説明のしかたであるが、われわれは、それをむしろ発話のつながりかたに求める。(2)と(3)から、前半部の述語「ネズミをつかまえる」は、(2)では「飼う」という結論を促すものとして、(3)では同じ結論を阻害するものとしてとらえることができる。また両者の後半の「飼う」の意味も、(2)と(3)ではまったく違うことにも注意しなければならない。(2)で「飼う」ものは実利性をとらえた動物で、(3)で「飼う」ものは、愛玩動物である。このように本稿では、多くの場合、(1)や(2)、(3)の後半部のような単文レベルの文が独立した意味を持っているとは考えず、これらの意味はつねに、その前後との意味的連関によって決定されると考える。

☆ 以上のような観点から、擬似同復文・擬似矛盾文についても、漠然とした「文脈」³⁾ではなく、これらが前後の発話とどのような連関をもっているかということについてくわしく観察しながら記述をこころみる。

3. 両タイプの発話の成立環境とその対照性

擬似同復文と擬似矛盾文が、形式的にはもちろんのこと、その発話環境など、さまざまなレベルで対照的な関係にあることについては、これまでも何度か言及してきた（大久保1999, Okubo 1999）が、ここでは、それ以来の理論的な修正もふまえて、あらためてその発話環境について整理しておく。両タイプの発話は、典型的には以下のような対照的な発話のつながりの中で生じる。

(4) このネコはネズミをつかまえない。しかしそんなネコでもネコはネコだ。

(5) このネコはネズミをつかまえない。だからそんなネコはネコじゃない。ある「ネコ」についてのある特徴づけ（ここでは「ネズミをつかまえない」という述定）があり、(4)ではその特徴づけにもかかわらず、その「ネコはネコ」であることが、また(5)では逆に、その特徴づけのために「そのネコはネコでない」と続けられている⁴⁾。だからと言って、統語的に必ずしもこういう形式の中のみで両発話が生じると言うのではなく、前半の述定部分は形容詞節となって「ネコ」にかかることもできるし（(6), (7)）、仮定・譲歩の副詞節となることもある（(8), (9)）。

(6) ネズミをつかまえないネコも（ネコは）ネコだ。

(7) ネズミをつかまえないネコはネコじゃない。

(8) ネズミをつかまえないくても、ネコはネコだ。

(9) ネズミをつかまえないのなら、そんなネコはネコじゃない。

以上を一般化すると、形式はどうあれ、「(この) XはXだ／でない」の実現のためには、まずXについて何らかの特徴づけがおこなわれ、その特徴づけにもかかわらず「XはXだ」と続けられるのが擬似同復文、その特徴づけのために「そのXはXでない」となるのが擬似矛盾文ということである。ここですぐに目につくのは、擬似同復文では「…でも、XはXだ」というように、主語のXがそのまま裸で生起可能なのに対し、擬似矛盾文では、かならず前半の特徴づけをうけた「…なX」を主語にしなければならないことである。これについ

ては本来詳しい議論が必要なところであるが、ここでは次のように言うにとどめる。上に見たように、「XはXだ」が生起するためには、Xについての何らかの特徴づけ（これをMとする）が不可欠で、実際に述べられているのは「MでもXはXだ」ということで、これは「MXもXだ」と言うことと、少なくとも以下のわれわれの議論に関しては同じ意味であると考えられる。したがって、擬似同復文において裸で生じる「X」も、発話の流れ全体においてみれば実際には何らかの特徴づけをうけた「MX」が問題にされているのである⁵⁾。

さて、次に、擬似同復文と擬似矛盾文のあとに続きうる発話について考えてみよう。(4)、(5)のつづきとしてはたとえば次の例のようなものが可能である。

- (4') このネコはネズミをつかまえない。しかしそんなネコでもネコはネコだ。面倒をみてやりなさい。
- (5') このネコはネズミをつかまえない。つまりそんなネコはネコじゃない。面倒をみるにはおよばない。

もちろん、「ネコはネコだ」「このネコはネコじゃない」という発話が必ずしも(4')、(5')のようなつながりのなかでのみしか生起しないというわけではなく、(2)、(3)の比較でみたように、「このネコはネズミをつかまえる」が両発話をみちびくこともあるし、(4')、(5')の後半部にしても、ほかにいろいろな発話が導かれる可能性はある。しかし、両発話の前後のつながりが具体的にどのような内容になっても、一貫しているのは、前半部の特徴づけMによってXは何らかの意味的影響を受けるが、それにたがいに対立する形でつながる発話が擬似同復文「MXもXだ」であり、それにしたがう形でつながる発話が「MXはXでない」という擬似矛盾文である。そして、両者から意味的にたがいに対立する結論「だからYだ」「だからYではない」（上の例では「面倒をみる／みない」）が導かれるということである。以下に類例をいくつかあげる⁶⁾。

- (10) a. この車は乗り心地が悪い。しかし、そんな車でも車は車だ。それでドライブに行こう。
- b. この車は乗り心地が悪い。つまり、そんな車は車じゃない。それでドライブに行くのはよそう。

- (11) a. ぼくたちの結婚は偽装結婚だ。しかし、そんな結婚でも結婚は結婚だ。一緒に住もうよ。
b. ぼくたちの結婚は偽装結婚だ。つまりそんな結婚は結婚じゃない。一緒に住むのはやめよう。
- (12) a. その法律は無理やり議決されたものだ。しかし、そんな法律でも法律は法律だ。われわれ国民にはそれを守る義務がある。
b. その法律は無理やり議決されたものだ。つまり、そんな法律は法律じゃない。われわれ国民にそれを守る義務はない。

以上を一般化すると、擬似同復文と擬似矛盾文は、次のような対照的な発話のつながりのなかにあることがわかる。

- (13) a. [擬似同復文] XはMだ。しかし、MXもXだ。だからYだ。
b. [擬似矛盾文] XはMだ。つまり、MXはXでない。だから非Yだ。

それでは、このような対照的な発話環境から、問題の2つのタイプの発話についてわれわれはどのようなことを知るができるだろうか。これについて、擬似同復文・擬似矛盾文をみちびく鍵となる特徴づけの表現Mの意味的性質をてがかりに分析をすすめよう。

4. 論証力と非現実化修飾子

本稿では、ことばの意味を、発話がどのように方向付けられていくかという点に注目して考えると述べた。このような観点から、たとえば同じ結論に方向付けられた2つの発話のうち、どちらがより強い力でその結論を導くかという点を問題にすることができる。Ducrot (1995) では、この力のことが「論証力 force argumentative」と呼ばれているが、これは、われわれの問題を考えるための重要な鍵概念となる。本稿では、Ducrot (ibid.) にならった大久保 (1999) での規定を若干書き換えて次のように規定する。

2つの論証A1:「PだからQ」、A2:「P'だからQ」について、A1を認めれば必ずA2も認めることになり、その逆がなりたたないとき、A2はA1

よりも「論証力が強い」という。

論証力の比較のためにもちいる日本語の基準としては、大久保 (ibid.) にならうて上記のA2の発話に「なおさら」を挿入できるかどうか⁷⁾という条件をそのまま用いる。たとえば、A1:「微熱がある、だから学校を休まなければならない」を認めれば、A2:「高熱がある、だから学校を休まなければならない」は自ずと認められ、他方その逆はなりたないような場合、A2はA1よりも論証力が強い。そしてこのとき同時にわれわれは「微熱がある、だから学校をやすまなければならない、高熱がある、だからなおさら学校を休まなければならない」と言え、「PだからQ、P'だからなおさらQ」と言えるかどうかということを「論証力」を比較する基準とする⁸⁾。

さて、論証力はさまざまな要因によって変化するが、発話を構成する要素の中には、それがあらわれることで発話全体の論証力の強弱に直接影響をあたえるものもある。そのもっとも単純な例が副詞の「とても」、「非常に」などで、「とてもP、だからQ」の論証力は「P、だからQ」よりも強まるのが普通である。

☆(14) 彼は親切だ、だからそのしごとをひきうけてくれるだろう。

彼はとても親切だ、だからなおさらそのしごとをひきうけてくれるだろう。

このように発話全体の論証力を強める言語要素のことをDucrot (ibid.) は「現実化修飾子 modificateur réalisant」と呼んでいる。これに対し、逆にある言語表現の存在が発話全体の論証力を弱めたり((15b)), 論証自体を逆転させてしまう場合((15c))もある。

(15) a. 頭痛がしたのでしごとを休んだ。

b. 軽い頭痛がしたのでしごとを休んだ。

c. 軽い頭痛がしただけだったのでしごとを休まなかった。

これらはともに「非現実化修飾子 modificateur déréalisant」と呼ばれ、論証力を弱めるだけのものは「軽減型 atténuateur」、論証を逆転させてしまう

ものは「逆転型 inverseur」と下位区分されている。逆転型は(15c)の「だけだった」のように述語の語尾を調整することによっても可能であるし、語彙的な要素によることも可能である。

(16) a. 夕食にハマチの刺身がでたので、かれはとても喜んだ。

b. 夕食に養殖ハマチの刺身がでたので、かれは喜ばなかった。

(17) a. 掃除をしたので、へやはきれいになった。

b. いいかげんに掃除をしたので、へやはきれいにならなかった。

軽減型・逆転型の別にかかわらず、非現実化修飾子の日本語における判定基準としては、修飾語をM、被修飾語をXとしたとき、「X、と言ってもMX」と言えるかどうかによるということを提案したい⁹⁾。

(18) 頭痛、と言っても軽い頭痛

ハマチ、と言っても養殖ハマチ

掃除をした、と言ってもいいかげんに掃除をした

以上、Ducrot (ibid.) の「論証力」「(非) 現実化修飾子」などの概念を日本語に即してまとめた。厳密には上記の判定基準にはまだ若干の問題がふくまれている。たとえば、非現実化修飾子の判定基準から(15b)は、(15a)より論証力が弱い。これを逆に言うと(15a)は(15b)より論証力が強いということになるのだが、「なおさら」のテストではこのことは確認しがたい。

(19) 軽い頭痛がしたのでしごとを休んだ。

頭痛がしたのでなおさらしごとを休んだ。

本稿では、こうした細かい問題はさておき、論証力を弱め、反転させる非現実化修飾子のはたらきに注目し、擬似同復文や擬似矛盾文について3章で見た名詞句を特徴づける要素Mがおしなべて逆転型の非現実化修飾子であることを確認することで、問題の現象の記述可能性をさぐってみたい。

5. 非現実化修飾子と擬似同復文・擬似矛盾文

5.1 擬似同復文・擬似矛盾文の中の非現実化修飾子

非現実化修飾子と擬似同復文・擬似矛盾文の関わりについて述べる前に、

「論証」という概念について少し補足しておく。これまでの議論では、「論証」について、ある文形式の言語表現から、別の文形式の言語表現がどのような力で結論として導かれるかという点に注目してきた。しかし、われわれは Ducrotらとともにより小さな語彙単位のものも論証的に中立ではなく、なんらかの結論と結びついていると考える。たとえば「車」という語彙は、これだけでたとえば「それに乗って遠くに行ける」という結論と結びついており、これは「車」という日本語の名詞についてのわれわれの知識（つまり「車」という語の意味）の一部となっている。そのために、われわれは通常、「車」という語彙についての知識のみで(20a)を容認することができるが、(20b)を容認するためには、それ以外の知識が必要である。

(20) a. 車がある。だからそれに乗って行けばいい。

b. 車がある。だからそれに乗って行くことはできない。

ただし、これに対してたとえば(21)のようなつながりは可能であるが、ここでは、「なのに」という接続詞によってこのつながりが通常のつながりにたいして違反的であることが明示的にしめされている点が重要である。すなわち、(21)の話し手は、(20a)が「車」という語彙が規範的にみちびくつながりであることを了解しており、その違反が生じていることを述べているのである。

(21) 車がある。なのにそれに乗って行くことはできない。

そこで名詞修飾としての逆転型非現実化修飾子を考えると、これが「非現実化」するものとは、まさに修飾された語彙そのものの意味からみちびかれるこのような論証なのである。次の(22)を(20a)と比較されたい。

(22) 車、と言っても故障した車がある。だからそれに乗っていくことはできない。

以上の議論からすでに明らかなように、3章でみた擬似同復文と擬似矛盾文において名詞Xを特徴づけるMとは、語彙Xによって可能な論証についての逆転型非現実化修飾子にほかならない。

(23) ネコ（だから飼おう）、と言ってもネズミをつかまえないネコ（だから飼うのはよそう）

- (24) 車（だからそれに乗って行こう）、と言っても乗り心地が悪い車（だからそれに乗っていくのはよそう）
- (25) 結婚（だから一緒に住もう）、と言っても偽装結婚（だから一緒に住むのはよそう）
- (26) 法律（だから守らなければならない）、と言っても無理やり議決された法律（だから守らなくてもよい）

5.2 擬似矛盾文の分析

それでは、このことと、擬似同復文、擬似矛盾文の意味とはどのように関係しているのだろうか。上記の例のうち「無理やり議決された法律」を取り上げて検討してみよう。

(12) a. その法律は無理やり議決されたものだ。しかし、そんな法律でも法律は法律だ。われわれ国民にはそれを守る義務がある。

b. その法律は無理やり議決されたものだ。つまり、そんな法律は法律じゃない。われわれ国民にそれを守る義務はない。

3章でとりあげたこの例について、議論の手順上、さきに擬似矛盾文の例である(12b)について考える。さきに述べたような意味で、語彙「法律」は、つぎのような論証をその語彙的意味の内に含んでいると考えられる。

(27) それは法律だ、だから守らなくてはならない。

そして、逆転型非現実化修飾子「無理やり議決された」は、このような論証を逆転することができる。

(28) その法律は無理やり議決された法律だ、だから守らなくてもよい。

ところで、当然のことだが、論証の逆転は逆転型非現実化修飾子によらずとも、単に問題となる名詞句を否定することによってもえられる¹⁰⁾。

(29) その法律は法律ではない、だから守らなくてもよい。

ここで、(28)と(29)の論証力を比較すると、直観的に(29)の方が論証力が強いことがわかる。ある文章に書かれたことを守る必要について議論する際に、その成立経緯はどうあれ「法律」と名のつくものか、「法律ではない」ものか

では後者の方が否定的結論に導かれやすいことは言うまでもない。また、このことは両者についての「なおさら」のテストでも言語事実として確認される。

(30) その法律は無理やり議決された法律だ、だから守らなくてもよい。

その法律は法律ではない、だからなおさら守らなくてもよい。

以上のことから、(12b)における擬似矛盾文のはたらきについて次のように言うことができる。なんらかの前件Pについて「P、だからそれを守らなくてもよい」という論証をおこなうためには、(28)のように「その法律は無理やり議決されたものだ」と言うことで可能である。しかし、(12b)では、(29)のような「言い換え」が行われ、語彙「法律」の非現実化の度合いが否定によって極限まで引き上げられることによって、その論証力が同様に極限まで高められているのである。他方、「法律でない」という言語表現は意味的に抽象度が高く、そこからさまざまな結論をみちびいて論証を成立させることができる（「…だから知っておく必要はない」、「…だから好きなように書き換えられる」など）。これらの可能性の中で、どのような具体的な論証が問題になっているのかを指定するのが特徴づけのM、すなわち「無理やり議決された」という具体的な意味をもつ非現実化修飾子の役割である。以上を図式的に記述すると以下のようになる。

- (31) {{無理やり議決された法律} だから {守る義務なし}} つまり
 {{非-法律} だから (なおさら) {守る義務なし}}

さらにこれを一般化すると、擬似矛盾文「MXはXでない」について次のような記述が可能である。

- (32) MXだからY、つまり、非Xだから (なおさら) Y

前述したほかの例についても同様に記述しておく。

- (33) {{ネズミをとらないネコ} だから {飼わない}} つまり
 {{非-ネコ} だから (なおさら) {飼わない}}

- (34) {{乗り心地の悪い車} だから {ドライブに行かない}} つまり
 {{非-車} だから (なおさら) {ドライブに行かない}}

- (35) {{偽装結婚} だから {一緒に住まない}} つまり

〔{非-結婚} だから (なおさら) {一緒に住まない}〕

ここで注目しなければならないのは、このような擬似矛盾文は、論証力の弱いものを強いものに言い換えているという点で、ある種の誇張表現であるということである。つまり、擬似矛盾文における論証は、以下のような発話が誇張表現としてなされた場合のそれと共通するものである。

(36) ぜんぜん勉強しなかったから、試験には合格しないだろう。

〔{少しでも勉強} だから {不合格}〕つまり

〔{勉強ゼロ} だから {不合格}〕

(37) おまえの考えてることはぜんぶお見通しだ、観念して降参しろ。

〔{考えをおおむね読める} だから {観念しろ}〕つまり

〔{考えをすべて読める}〕だから {観念しろ}

つまり、擬似矛盾文は(36)、(37)のような誇張表現の一種で、擬似矛盾文があたえる独断的、あるいは修辭的な印象は、このような性質による。

5.3 擬似同復文の分析

つぎに、擬似同復文について同じ例を使って考えてみよう。

(12) a. その法律は無理やり議決されたものだ。しかし、そんな法律でも法律は法律だ。われわれ国民にはそれを守る義務がある。

ここでも、「無理やり議決された」が非現実化修飾子としたはたらいていゝことについては擬似矛盾文の場合と同様である。ところがここでは、擬似同復文を介して「守る義務がある」という擬似矛盾文とは逆の結論に結びつき、「その法律は法律である、だから守らなければならない」という論証が主張されている。(31)にならってこれを図式化すると次のようになる。

(38) 〔{無理やり議決された法律} だから {守る義務なし}〕しかし

〔{法律} だから {守る義務あり}〕

つまり、「しかし」以下の後半部は(31)とまったく逆になっているのである。ここで、「非現実化修飾子」のはたらきと文法的否定のはたらきの共通性と違いについてくわしくみておく必要があるだろう。(28)、(29)でみたように、逆

転型非現実化修飾子は、その語彙がみちびく論証を逆転させるという点で、否定と同様のはたらきをする。

(28) その法律は無理やり議決された法律だ、だから守らなくてもよい。

(29) その法律は法律ではない、だから守らなくてもよい。

両者には論証力においてちがいがあり、この点について後者が前者にまさることについてもすでに述べた。しかし、両者の間にはそのような段階的なちがいだけでなく、もっと本質的なちがいがある。それは非現実化修飾子「無理やり議決された」が非現実化修飾子であるためには、それがかかる名詞句「法律」が、あくまでも「法律」であり続けなければならないのに対し、否定ではそのこと、つまり「法律」であること自体が否定されているということである。言い換えれば、非現実化修飾子は、「法律」が「法律」であるからこそその「非現実化」をおこなうことができるのであって、そもそも「法律」でないものを、さらに「法律でなくする」ということはできないのである。この語彙「法律」を非現実化する言語表現としては「無理やり議決された」以外にも「形式だけで実質をとまなわない」、「民意を反映しない」、「独裁政権下で議決された」などさまざまなものが考えられる。その中で、非現実化の度合いのもっとも強い修飾子Mをを仮に選び出せたとして、これをともなう「M法律」にしても、やはり「法律」であることにかわりないのである。前節でみた擬似矛盾文では、その限界が「誇張表現」特有の発話方略によってのりこえられ、論証力において劣る「非現実化修飾子+Xだから非Y」がより強い「非Xだから非Y」に置き換えられた。このような「のりこえ」があっても、両者は論証という点では共通しており、したがってその間には「つまり」「すなわち」などで表現されるような「言い換え」の関係が見られる。これに対して擬似同復文では逆に、上に述べたような、「非現実化修飾子+X」があくまでも「X」であり続けることの方が重視され、非現実化修飾子が論証的に否定と同様のはたらきをしてしまうことがくい止められている。そのため、両者の間には対立する発話の関係が生じ、(12a)の「しかし」に表現されているような「対立」の関係が見られるのである。

しかし、このようなちがいににもかかわらず、5.2節でみた、論証を指定するものとしての非現実化修飾子Mの役割はここでも同じで、語彙Xがみちびきうるさまざまな論証の中から、Mによって問題となるべき論証が指定される。その非現実化修飾子としての否定性がそのまま端的な否定に言い換えられたものが擬似矛盾文であるのに対して、逆にその否定性をくい止め、対立的な発話を行っているのが擬似同復文なのである。

以上を(32)にならって(39)のように一般化し、ほかの例についても図式的な記述をおこなっておく。

(39) MXだからY、しかし、XだからY

(40) 「ネコはネコだ」

{ {ネズミをとらないネコ} だから {飼わない} } しかし

{ {ネコ} だから {飼う} }

(41) 「車は車だ」

{ {乗り心地の悪い車} だから {ドライブに行かない} } しかし

{ {車} だから {ドライブに行く} }

(42) 「結婚は結婚だ」

{ {偽装結婚} だから {一緒に住まない} } しかし

{ {結婚} だから {一緒に住む} }

これらの擬似同復文が「同語反復的」でありながら解釈上問題をおこさないのは、このように非現実化修飾子MによってMXが端的な否定「非X」と同様に扱われそうな局面で、これをXのほうに引きもどすはたらかきがあるからである。前節で、擬似矛盾文が論証的にはある種の誇張表現とむすびつくことをしめしたが、擬似同復文のほうは、以下のような「自明の理」を述べる発話と論証的に共通の構造を持っている。下の二例では、実際には発話されていないが、それぞれ括弧書き内の「観光地化された」「都会の雑踏の中の」が、しめされた論証の非現実化修飾子としてはたらいっている。

(43) この教会は祈禱の場です¹¹⁾。(観光地化した有名な教会内の掲示物)

{ {観光地化した教会} だから {静粛は要求されない} } しかし

{教会} だから {静肅は要求される}

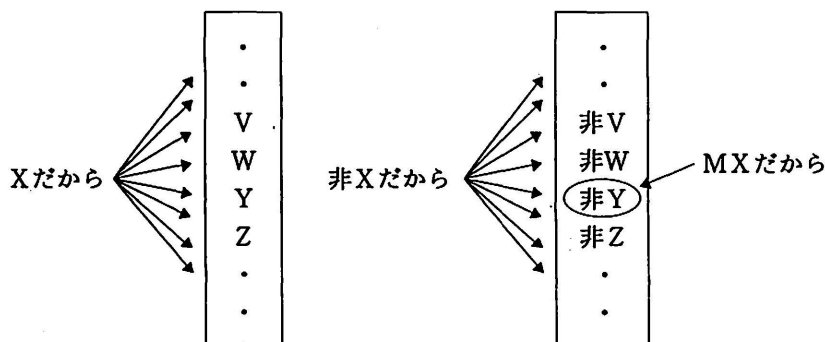
(44) 舗道は灰皿ではありません。

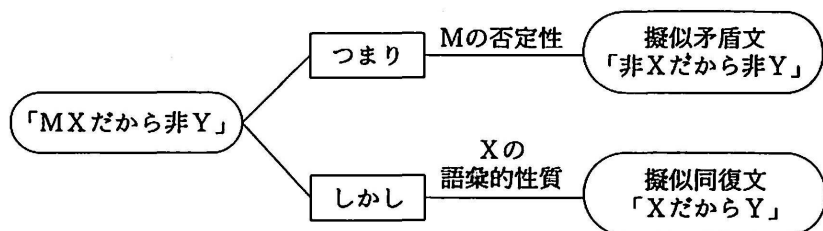
{都会の雑踏の中の舗道} だから {吸い殻をすててよい}

{舗道} だから {吸い殻をすててはいけない}

6. まとめ

擬似同復文・擬似矛盾文について以上述べてきたことは、要するに「XだからY」という論証が成立するときに、「限りなく非Xに近いX、だから非Y」をどのようにあつかうかという問題である。Mを、論証「XだからY」の逆転型非現実化修飾子であるとすると、擬似同復文・擬似矛盾文は以下のように図式化できる。Xはその語彙の意味からさまざまな結論と結びついて論証（「XだからV」「XだからW」「XだからY」「XだからZ」など）を行う可能性を持っている。そしてXの否定「非X」についても同様に「非Xだから非V」「非Xだから非W」「非Xだから非Y」「非Xだから非Z」などの論証をおこなう可能性を持っている。そこで、論証的に否定と同様のはたらきをしうる逆転型非現実化修飾子Mは、その意味的具体性によって、否定の論証の可能性の中からある特定の論証「MXだから非Y」を指定し、これを「非Xだから非Y」と「言い換え」（「つまり」）られるものであるとするのが擬似矛盾文、Mのはたらきによって成立しうる論証にあくまで「対立」（「しかし」）し、「Xだから





Y」をつらぬくのが擬似同復文ということである。

7. 展望

以上、本稿では擬似同復文・擬似矛盾文についてこれらが発話される言語的な環境を吟味することによってその発話機能を考察してきた。ここであつかったすべての例は、短い紙幅で論点を明らかにするために作例によったが、本来は実例によって実証されなければならないことは言うまでもない。本稿は、それに先立ついわば「基礎研究」として位置づけられるものとして、非現実化修飾子や論証内容がかならずしも明示的に発話されるわけではない実際の例への動的な応用をめざしたい。

引用文献

- CAREL, Marion (1998) 《Prédication et argumentation》 in *Actes du colloque d'Uppsala de juin 1996*.
- CAREL, Marion & DUCROT, Oswald (1999). 《Le problème du paradoxe dans une sémantique argumentative》, *Langue française*, 123.
- DUCROT, Oswald. (1995) 《Les modificateurs déréalisants》 *Journal of Pragmatics*, 24, : 145-165.
- 大久保朝慈 (1999) 「XはXだ」 / 「このXはXでない」の言語内論証理論にちとづく考察「言語文化学」第8号、大阪大学言語文化学会
- OKUBO, Tomonori (1999) 《〈Kusattemo tai〉 ou une étude sur quelques proverbes (tautologiques) ou (contradictaires) en japonais》 in BERTHON, Jean-Pierre et Anne GOSSOT (dir.), *Japon Pluriel 3, Actes du troisième colloque de la Société française des études japonaises*, Campus Michel-Ange du CNRS, Paris, 17-19 décem-

bre 1998, Editions Philippe Picquier, 323-331.

大久保朝憲（2000）「『矛盾文』の発話機能」『仏語仏文学』27号、関西大学フランス語フランス文学会

主

- 1) たとえば「寒い」ということばの意味は、ソシユールなら「暑い」「暖かい」「涼しい」などのほかのことばとの否定関係でその意味をもっており、現象世界の感覚的事実とは直接的な関係がないと言うことと同じで、「XはXだ」という発話をそれが参照する世界との関係ではなく、ことばに内在的な問題としてとらえようということである。もちろん、ここでは単語ではなく、ひとつの「言い回し」が問題にされるわけであるから、上の例のような分析は不可能で、そのための道具立てとして「論証」を導入するのである。
- 2) したがって、本稿中に導入される専門概念もそのごく一部のものである。大久保（1999）では、理論の全体像、鍵概念について概括しているが、そこでの現象の分析については本稿では大幅な修正をくわえている。
- 3) そもそもこの「文脈」というものの自体が、談話のレベルでどの程度構築されるものかということについて、語用論でじゅうぶんに論議されているようには思えない。その意味で、本稿では従来「文脈」と言われてその輪郭が明らかにされていないものを明示化することのみであると考えても大きな誤解は生じないであろう。
- 4) ここで言う「特徴づけ」とは、2節でとりあげた「指示対象」への「属性付与」のことではなく、言語表現「ネコ」に、ある意味的方向づけをあたえるための「意味的限定」と理解されたい。
- 5) 日本語の擬似同復文に限っていえば、「Xは」の統語的な主語としての地位に疑義をさしはさむこともできる。以下の例と比較されたい。
 - (i) ネコはネコでも、タマはちょっとちがう。
 - (ii) たしかに彼も、教師は教師だから、ある程度自分の行動には気をつけているだろう。
- 6) (10)－(12)をふくめて、ここにあげた作例が現実の発話としては不自然であるという指摘があるかもしれないが、われわれは、後の議論との関係で、ここで発話のつながりかたが明示的にしめされるよう、文のつくりをある程度類型化した。実際にはさまざまな形式が可能であることは言うまでもなく、そのごく一端は(6)－(9)の例でもしめした。また、前後の発話が実際には発話されないケースも数多い。
- 7) 文の文法性ではなく、これを挿入しても、発話のつながりが自然であり続けるかということ。
- 8) 論証力の強弱は、絶対的なものでもなく、発話をとりまく一般的な信念などにもとづくものでもない。われわれはA1とA2に上記のような関係があると認められるときにしかるべき論証力の差が認められると述べているのであって、一般的事実として熱が高いことは低いことよりも登校をさまたげる強い要因となるということは、この概念を直接ささえるものではない。特殊な文脈で両者の関係が反転することはありうるし、そのときには論

証力も反転するというだけのことである。また、「なおさら」の基準の欠点は、これが「～である、だからなおさら…だ」のような断定的な発話にしかなじみにくいことで、たとえば「～である、だから…しよう」のようなタイプの発話には挿入しがたい。当面は、後者のようなタイプの発話も前者のようなタイプに書き換えることで「なおさら」のテストを行うことにする。なお、Ducrot (ibid.) では、フランス語で《P, et même P'》を言えることがその基準とされている。

9) Ducrot (ibid.) では、《X, mais MX》とされている。

10) 「法律でもないただの文章を守ることはない」とでもパラフレーズしうるものである。またこのことから、「P, だからQ」という発話は、5.1でもみたように「P,なのに非Q」と相関し、さらに「非P, だから非Q」とも相関しているということ、そして、本稿には直接関与しないが「非P,なのにQ」という論証をふくめた都合4つの論証が、ひとつの意味のブロックをなしているということが、たとえば Carel & Ducrot (1999) でも主張されている。これは、われわれの論証的言語活動が論理学における含意 implication 関係とは本質的に性質を異にするものであることを示すものでもある。また、文法的否定が逆転型非現実化修飾子と同じはたらきをすることから、否定もその一種であるとみなすこともできそうであるが、両者の間には後述する本質的な違いがある(5.3参照)。

11) この例はCarel (1998) で扱われたフランス語の実例を日本語に書き換えたものである。